様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　5 月 20 日現在

機関番号：32686
研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2007～2010
課題番号：19202019
研究課題名（和文）近代移行期の港市における奴隷・移住者・混血者－広域社会秩序と地域秩序
研究課題名（英文）The Changing Intermediary Role of Slaves, Immigrants and Mixed Blooded People between Local and Foreign Communities at Port Cities during the 19th and 20th Centuries
研究代表者　弘末　雅士（HIROSUE　MASASHI）
立教大学･文学部･教授
研究者番号：40208872

研究成果の概要（和文）：地中海世界・イスラーム世界・欧米・中南米・南アジア・東南アジア・東アジアにおける奴隷の歴史を比較検討することができ、地域相互間の奴隷取引や奴隷をめぐる観念の展開を広域的に解明できた。また移住者の広域ネットワークの形成に果たす役割とともに、移住先の社会の秩序構築に積極的に関わったことが明らかとなった。そうした移住者を迎えた現地人妻妾のアジアにおける事例が比較検討され、彼女らやその子孫が、前近代において商業活動や港市の社会統合に重要な役割を担ったことが解明された。さらに近現代社会における新たな仲介者や媒体の存在に注目する必要性を認識した。

研究成果の概要（英文）：The study of the role played by slaves, immigrants and people of mixed blood as intermediaries between foreign visitors and local society has shed new light on our understanding of social integration of ports cities.　Through the comparative study between slaves in the Mediterranean, Islamic, European and American worlds and those of South, Southeast and East Asia, both similarities and differences in social status and the very concept of “slave” have come to light.　The importance of role of immigrants not only in enlarging networks linking their homes with migration destination points, but also in social cooperation within their adopted societies has been examined.　The role of local women who cohabited with foreigners and migrants has been clarified through a wide range of case studies covering East, Southeast, South and West Asia.　The role of such mediators between foreigners and local people in the modern world needs to be further examined.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
2008 年度	7,100,000	2,130,000	9,230,000
2009 年度	7,200,000	2,160,000	9,360,000
2010 年度	7,700,000	2,310,000	10,010,000
年度			
総　計	27,500,000	8,250,000	35,750,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・史学一般
キーワード：港市　環シナ海世界　環インド洋世界　環地中海世界　環大西洋世界　環太平洋世界　世界秩序　地域秩序　奴隷　移住者　混血者　現地妻

１．研究開始当初の背景：
（1）多様な人々が到来する港市における社会統合に、奴隷・移住者・混血者が重要な役割を担ったことに着目した。これまでの研究

では、都市の中核的権力者のもとでの人や文化の交流が注目されてきたが、実際に多様な来訪者との交流を担ったのは、奴隷・移住者・混血者たちであった。こうした存在に着目することで、地域の内と外を媒介する役割に光が投げかけられ、地域社会や広域ネットワーク形成の仕組みを解明するための手掛かりを得ようとした。

（2）とりわけ人々の交流が加速度化されてくる近代移行期における、奴隷・移住者・混血者の役割に注目しようとした。近代国際秩序と国民国家が構築される前夜の状況を、彼らの担った役割の観点から考察することで、前近代と近代とを媒介的にとらえようと考えた。彼らの役割が変容することで、港市での外来者との交流はどのように変化し、近代以降「不平等」や「従属」がどのように観念されるようになったのか検討することを計画した。

２．研究の目的：世界の諸海域世界（環シナ海世界、環インド洋世界、環地中海世界、環大西洋世界、環太平洋世界）のつなぎ目となった港市において、外部世界と現地社会を仲介した奴隷・移住者・混血者が、近代移行期に広域社会秩序や地域秩序の形成にいかに関わったのか、比較検討する。彼らの歴史的役割の解明をとおして、近代の国際秩序や民族意識が構築されるなかで、人種間や民族間における不平等意識や差異が顕在化する背景について考察する。

３．研究の方法：

（1）時代と地域を比較検討する手法を重視し、研究会を可能な限り持ち、本科研メンバーのみならず、外部からも専門家を呼び、テーマについて事例発表をしてもらった。

初年度（2007 年度）は、科研メンバーのそれぞれの専門領域をもとに、本科研のテーマについて事例報告をしてもらい、従来どのような事柄が取り上げられ、これからどのような課題に取り組むべきか議論した。2008 年度には、科研メンバー以外の専門家にも研究会に加わってもらい、本テーマの事例について報告してもらった。環シナ海世界では、近世日本の平戸や長崎の研究者に発表を依頼し、東アジアにおける外来者の港市での居住の実態について検討した。また近世インドならびに東アフリカにおける奴隷取引についても、外部から研究者を招き報告してもらった。

2009 年度には、環シナ海世界の琉球と環インド洋世界のカルカッタにおける外来者の居住の実態を報告してもらい、同居者となった現地人女性の役割について検討した。さらに地中海世界のイスタンブールの宗教施設の建築物について報告してもらった。これらを受けて科研メンバーの報告も、諸事例の相互的関係の考察に力点を置いた。

最終年度の 2010 年には、このプロジェクトで何をどこまで明らかにすることができたか、全員でシンポジウムを組み検討するなかで、奴隷の実態やそれをめぐる概念の変遷、移住者が形成するネットワーク、移住者を迎えた奴隷や現地人妻妾の役割、さらには混血者の諸社会における実態と近現代におけるその変容を比較検討した。

（2）同時に世界の諸海域世界のつなぎ目となる港市の重要性に着目し、東アジア、東南アジア、南アジア、地中海世界、イベリア半島の代表的な港市を、当該地域の研究者のみならず隣接する諸地域の研究者も含めて合同で、訪問調査した。

2007 年度には、本科研メンバー4 名が環シナ海世界の港市である中国の上海、福州、泉州、厦門、スワトウ、広州の港市を訪問調査した。また研究協力者 2 名に依頼して、インドネシアのジャワ北岸港市を調査してもらった。2008 年度には科研メンバー9 名がバンコクとアユタヤを、さらにメンバー5 名が西北インドのディウならびにムンバイ（ボンベイ）を訪問調査した。また 2 名の研究協力者がオランダとイギリスにおいて東南アジアにおけるインド綿布取引についての史料調査をおこない、あわせてジャワのイスラーム化に重要な役割を担ったとされるアラブ系宗教家の聖墓の訪問調査を行った。環シナ海世界ならびに環インド洋世界の港市の特質について検討した。

2009 年度には、科研メンバー9 名が環地中海世界と環インド洋世界のつなぎ目となるイスタンブールとアテネ、クレタ島の港市を訪問調査した。また研究協力者 2 名が、東南アジア大陸部におけるインド綿布の取引を担ったイギリス人商人に関する史料調査をイギリスで、ジャワにおける華人系移住者の史料調査をオランダで行った。最終年度の 2010 年度には、メンバー8 名が地中海世界と大西洋世界のつなぎ目となるスペイン、モロッコ、ポルトガルの港市を訪問調査した。また研究代表者は、港市と後背地との関係を考える上で重要となる河川交通の実態について検討するために、メコン川流域の港市を訪問調査したほか、研究協力者 2 名がオランダとイギリスにおいて、東南アジア港市におけるマレー人や華人の歴史研究のため史料調査を行った。

４．研究成果

（1）これまで時代と地域別に検討されてきた奴隷の実態と概念を、地域間交流や比較の観点を取り入れ、また古代から近代にいたるまで通時的に検討を加え、広域的に明らかにすることができた。日本における奴隷研究の

視野を広域に開く端緒を構築できたといえる。

古代地中海世界は奴隷制社会であり、彼らが鉱山労働をはじめ労働力として重要な役割を担ったことは否定できないが、奴隷の実態は多様であり、またその地位は流動的で、画一的に捉えることの危険性が指摘された。またその後地中海世界で影響力を行使したイスラーム時代には、社会を支えるために奴隷が必要とされ、非ムスリム世界からの戦争捕虜を奴隷とした。彼らの地位は流動的で、奴隷のなかには軍人として頭角を現したものや、女奴隷として宮廷の支配者や高官の妾となるものもあり、その子孫が支配者となった場合もあった。一般にイスラーム世界で奴隷は、主人の権威を示すための威信材であったことが明らかにされた。イスラーム法は奴隷の扱いを規定しており、ムスリムに改宗すると奴隷身分から解放された。イスラーム社会において奴隷は労働力として兵士として交易商品として、貴重な人的資源であったことを検討した。

レコンキスタで勢力を台頭させたポルトガルは、戦争捕虜のムスリムを奴隷とし、船乗りや水汲みとして活用した。またアフリカのムスリム勢力との戦争でも捕虜を多数獲得し、奴隷とした。ブラジルでのプランテーションでは、多数のアフリカ出身の奴隷を使用した。アメリカ大陸でアフリカ系奴隷を活用する起点となったが、ポルトガル人が奴隷を使用する上で、イスラームの奴隷観念を少なからず継承・発展させていることが明らかとなった。

一方インドに進出したポルトガルは、現地人の奴隷も使用したが、彼らを海外に持ち出すにあたって、それを望まない現地権力との軋轢を招いた。バタヴィアをはじめとする東南アジアの港市に拠点を構えたオランダも、港湾を維持するための労働力として奴隷を活用した。また単身赴任者が多かった彼らは、女奴隷と同棲するものも少なくなかった。近世アジアにおいて、ポルトガルをはじめヨーロッパ人が進出した地で現地人の奴隷取引や人身売買を行うにあたり、しばしば現地社会と摩擦を起こしていることが議論された。そうした事例を比較検討することで、奴隷の境遇の地域的差異さらには諸勢力が交流することによる奴隷観念の変容を考察する重要性が提起された。また 19 世紀になりヨーロッパ権力のもとで奴隷制が廃止されだし、賃労働者が東南アジアに多数来航し始めると、密貿易による女奴隷の取引が 19 世紀終わりまで横行したことが明らかとなった。

奴隷の境遇は、地域によって異なり、それなりの自由が奴隷に付与されていた場合もある。しかし、啓蒙主義や自由主義思想の台頭により、奴隷が廃止されたことは、奴隷観念にも大きな影響を及ぼしたことが明らかになった。東アジアも例外ではない。元来古代中国で戦争捕虜を指した「奴隷」という語が、幕末に再び日本人によって用いられ始め、中国にも再導入された。日本でも中国でも、この「奴隷」という語が、支配者に対し隷属状態にある意味で用いられ、そうした状態からの離脱する必要性が説かれた。近代中国では、とりわけ中国民族がそうした状況にあり、そこからの解放が強く訴えられた。今日東アジアで、「奴隷」という語がきわめて否定的なニュアンスで使われる歴史的背景が解明された。

なお奴隷を廃止したことで結果として人種間や民族間の差異が強調されるに至り、外来者と現地人との交流が以前より緊張感を伴い出したことは、逆説的に奴隷の社会統合における重要性を示していることが、改めて認識された。

（2）移住者の出身地と移住先とをつなぐ広域ネットワーク形成に果たす役割とともに、従来比較的軽視されてきた移住先の社会秩序構築に果たす役割の重要性が解明された。

古代地中海世界では、ギリシアからの植民者による移住先のコミュニティは、本国からの独立性が高かった。本国は養える人口に限界があり、必ずしも移住者とのネットワークづくりに熱心でなかった。また出身地で社会的に抑圧されていた場合も、移住先での社会統合にエネルギーを傾けることが多い。16 世紀終わりごろ宗教的迫害を受けたヨーロッパ大陸のプロテスタントがイギリスへ移住すると、彼らは都市住民や国王の支援を得て、自分たちの教会を構え宗教活動を進めたことが指摘された。王権も彼ら移住者の活動を支援することで、都市コミュニティへの影響力の拡大を図った。

また従来インド系住民のネットワークの拡大として注目されがちであったイギリス植民地期のインド人移民の活動にも、新たな光が投げかけられた。英領マラヤに移住したムスリムのインド系住民は、移住先でマッチの商標のデザインを考案し、マレー人の間でマラヤの心象風景の形成に寄与した。またアメリカにおけるスウェーデン系移住者が、模範的アメリカ国民になるため、スウェーデン人の優秀性を唱え、彼らのアイデンティティを維持するとともに、国民統合に積極的に関与する事例が提示された。さらにオランダ領東インド（インドネシア）におけるアラブ系移住者が、華人系住民に対抗して原住民ムスリムと連携して政治活動を始め、結果として東インドの原住民意識を覚醒させた役割についても論じられた。

移住先で少数派となる彼らは、時代の変動期において、多数派の動向に敏感にならざる

を得ず、彼らの社会的立場を安定的にするために、移住先の社会秩序構築に積極的にかかわることが明らかとなった。移住者の担う役割を総合的に考察することの必要性が改めて提起された。

（3）前近代において上記の移住者と港市で同居したのは、先の奴隷をはじめ現地人妻妾であった。アジアにおける現地人妻妾の実態が、メンバー以外の研究者の協力も得て、かなり明らかになった。この分野についても奴隷研究と同様に、日本における研究状況に広域なパースペクティブを開いたといえる。

江戸期の長崎においては、丸山遊女がオランダ人や唐人の同棲相手となった。オランダ人は彼女らへの礼金として、砂糖で支払いを行った。彼女らは、その一部を実家に送り、商売を行うことができた。また琉球における薩摩藩の役人や清朝からの役人にアテンドした現地人女性たちも、その機会を利用して商業活動を拡大しようとしたことが明らかになった。中国の広州における蛋家の女性たちの活動にも同様なことが指摘された。外来者と同棲した現地人女性が商業活動に携わった事例は、近世東南アジアでも広く事例が報告されており、東アジアの事例と比較検討できるパースペクティブが開かれた。

東南アジアを植民地支配したヨーロッパ勢力もこうした慣習にのっとり活動した。オランダ領東インドでは、19 世紀終わりの時点でヨーロッパ人男性の約半数が現地人妻妾を有した。彼女らは家事を司るとともに、外来者に現地の習慣や言語を教える役割を担った。彼女たちとの間にできた子孫たちが、東インドのヨーロッパ人コミュニティの過半数を占めていたことが明らかになり、植民地社会を支えた現地人女性や混血者の重要性を再確認した。

一方インドでは、イギリス人の来訪者と同棲したのがムスリム女性であったことが明らかとなった。東アジアや東南アジアと異なり、彼女らは商業活動にはほとんど関与しなかったが、彼女らの実家の家長は、イギリス人とのパイプを形成した。また西アジアの港市において非ムスリムの外来者と同棲したのは、女奴隷であった。

これまで外来者の活動に主な光があてられていた分野に、介在する現地人女性をとおして現地社会と外部世界との関係を考える重要性が提起された。アジアにおける女性史研究にも貴重な題材を提供できる成果を獲得した。

（4）港市の社会統合に果たす混血者の役割の重要性とともに、彼らが他地域とのネットワークづくりに果たす役割も明らかとなった。この分野は、研究が乏しい領域であり、いくつかの新たな実態を解明できた点に意義がある。

琉球で薩摩の役人と現地妻との間の男子は、しばしば薩摩の役人の関係者より養子としての縁組の要請がなされた。またバタヴィアの華人と現地妻との間の男子は、しばしば中国へ父親とともに帰る場合があった。またアジアにおけるオランダ人と現地人妻妾との間の混血者は、父親によって認知された場合、成人後オランダが商館を有する各地の港市を往来することが多く、港市間ネットワーク形成に重要な役割を担ったことが明らかとなった。アジアにおけるポルトガル人の子孫の活動も同様である。アジアでオランダとの競合に敗れたのちも、在地の港市に商人や傭兵として拡散した彼らやその子孫は、アジア商人との関係を強め、残された拠点を活用しながら、アジア間交易に関与したことが明らかとなった。

こうした混血者の役割が、近代に入ると欧米における人種主義の台頭により、社会において周縁化していくことが指摘されてきた。それに対し、当該の諸地域で「混血者」とはそもそも何か、またなぜそうした存在が問題となるのか、考察する必要性が提起された。

（5）近代以降、奴隷は制度として廃止されたが、代わって台頭した人種主義によって、人種間の差異がより強調されるにいたったことが、アメリカをはじめとする欧米の事例をとおして明らかにされた。一方、混血者社会を比較的長期に有した地域では、それに対し複雑な動きをすることが提示された。

アメリカでは異人種間結婚を禁止する法体系が形成された。また黒人、アメリカ先住民、アジア系移民は「望ましい国民」のイメージから排除された。人種主義は、アジアでも 19 世紀終わりから植民地支配を支える理念として強くなった。他方、欧亜混血者社会が比較的長い歴史を有していたインドネシアでは、20 世紀になっても 1920 年代半ばまで、ヨーロッパ人男性の現地人女性との結婚率が増加した。この時期インドネシア民族主義運動も高揚していたが、新聞や小説などの出版物が民族意識の創出に寄与するとともに、他方で多様な男女関係のイメージを提供した可能性が出てきた。フィリピンやブラジルなど同様な歴史的背景を有する地域との比較検討の必要性が喚起された。

ポストコロニアリズムが提示する人種間や民族間の差異が顕在化する一方で、それらを仲介しようとする新たな介在者や媒体も存在し、それらを含め総合的に考察する必要性が提起された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 40 件）
① 高橋秀樹、「アフロディテ女神をめぐる宗教史の一側面－Ilias 5.311-431 からの展望－」『西洋史研究』、査読有、39 巻、2010、pp.77-94、
② 弘末雅士、「ミステリアスな現地妻(ニャイ)－インドネシア民族意識の生みの母？」、『史苑』、査読無、70 巻 1 号、2009、pp.1-11、
③ 鈴木信昭、「利瑪とう『両儀玄覧図』攷」、『朝鮮学報』、査読有、206 巻、2008、pp.1-40、
④ 貴堂嘉之、「「人種化」の近代とアメリカ合衆国－ソシアビリテの交錯と「国民」の境界－」、『歴史学研究』、査読有、846 号、2008、pp.90-99、
⑤ 清水和裕、「ユズデギルドの娘たち：シャフルバーヌー伝承の形成と初期イスラーム世界」、『東洋史研究』、査読有、67 巻 2 号、2008、pp.1-30、

〔学会発表〕（計 24 件）
① 疇谷憲洋、「新キリスト教系知識人リベイロ・サンシェスの教育論と社会改革論－18 世紀ポルトガルにおける啓蒙改革の企図－」、広島史学研究会、2010 年 10 月 31 日、広島大学、
② 石川禎浩、「小説『劉志丹』事件の歴史的背景とその展開」、東北中国学会、2010 年 5 月 29 日、弘前大学、
③ 唐澤達之、「都市法人と基盤整備」、社会経済史学会、2009 年 9 月 26 日、東洋大学、
④ 弘末雅士、「マレー世界におけるアディル（公正／正義）概念の展開へのコメント」、東南アジア学会、2009 年 6 月 7 日、京都大学、
⑤ 大石高志、「インド系ムスリム商人と東南アジア：広域ネットワークの地域接合とその歴史的変容」、国際東方学者会議（東方学会）、2008 年 5 月 16 日、日本教育会館、

〔図書〕（計 27 件）
① 弘末雅士（他との共著）、『近代アジアの自画像と他者－地域社会と「外国人」問題』、京都大学出版会、2011、39－57 頁。
② 荷見守義（他との共著）、『東アジア海域叢書 2　海域交流と政治権力の対応』、汲古書院、2011、61－84 頁。
③ 石川禎浩（単著）、『革命とナショナリズム（中国近現代史シリーズ第 3 巻　1925－1945）』、岩波書店、2010、240
④ 貴堂嘉之（他との共編）、『ジェンダーと社会－男性史・軍隊・セクシュアリティー』、旬報社、2010、392
⑤ 弘末雅士（他との共著）、*The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the 19th and 20th Centuries*, The Toyo Bunko, 2009, pp.114-137.

〔その他〕
ホームページ等：
http://www2.rikkyo.ac.jp/web/hirosue/
（「活動紹介」の項目が当科研の活動報告）

６．研究組織
(1)研究代表者
弘末　雅士　（HIROSUE　MASASHI）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：40208872

(2)研究分担者
鈴木　信昭　（SUZUKI　NOBUAKI）
富山大学・人文学部・教授
研究者番号：50206512

唐沢　達之（KARASAWA　TATUYUKI）
高崎経済大学・経済学部・教授
研究者番号：10295438

貴堂　嘉之（KIDO　MASAYUKI）
一橋大学・社会科学研究科・教授
研究者番号：70262095

高橋　秀樹（TAKAHASHI　HIDEKI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：80236306

荷見　守義（HASUMI　MORIYOSHI）
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：00333708

石川　禎浩（ISHIKAWA　YOSHIHIRO）
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：10222978

清水　和裕（SHIMIZU　KAZUHIRO）
九州大学大学院・人文科学研究科・准教授
研究者番号：70274404

土田　映子（TUCHIDA EIKO）
北海道大学大学院・メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号：50313169

大石　高志（OISHI　TAKASHI）
神戸市外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号：70347516

疇谷　憲洋（KUROTANI　NORIHIRO）
大分県立芸術文化短期大学・准教授
研究者番号：80310944

佐々木　洋子（SASAKI　YOKO）
帯広畜産大学・畜産学部・講師
研究者番号：30332480

(3)研究協力者

遠藤正之（エンドウ　マサユキ）立教大学アジア地域研究所・研究員
研究者番号：なし

久礼克季（クレ　カツヨシ）立教大学大学院文学研究科・後期博士課程
研究者番号：なし